１．瀬戸内の人文景観の特徴と保全

（１）令和時代の故郷（ふるさと）再発見（ディスカバージャパン）と瀬戸内の人文景観

JR 岡山駅で「瀬戸の花嫁」のメロディーを聞くたびに多島美の風景が思い出され、郷愁に駆られる。岡山に住んだのはわずか２年間であったが、蘇る光景は「ふるさとの海」のようで不思議と懐かしい。小柳ルミ子さんのこの歌が発売されたのは今から約 50 年前、昭和 47(1972)年のことである。

戦後、日本は右肩上がりの成長を続け、昭和 43(1968)年には GNP 世界第２位の経済大国となった。そして、昭和 45(1970)年には“人類の進歩と調和”がテーマの大阪万博が成功裡に終わり、わが国の経済は絶頂期を迎えた。栄華はいつまでも続くものと感じられた。一方で、日本の経済を四大工業地帯とともに支えてきた瀬戸内海は汚れ、自然の海岸はなくなっていった。赤潮が各地で発生し、埋立てが進んだ。「瀬戸内海環境保全特別措置法」の前身である「瀬戸内海環境保全臨時措置法」が制定されたのは昭和 48(1973)年、丁度、この頃である。

そしてまた、当時の国鉄による昭和の「ディスカバージャパン」のキャンペーンが展開されたのもこの時期であった。昭和のディスカバージャパンは「旧来の名所や観光地をまったく意識させないことで、逆に新しい旅行需要をつくり出し、国内旅行先の再開発の役割を果たした」[1)]。若い女性を中心とする新しい大きな動きは、各所に残る日本の良さを見つめ直す契機となった。振り返ってみると、貿易によりグローバル化が進んだ時代にあって、あたかも一方に振れ過ぎた振り子の揺り戻しのように思えてくる。

昭和から平成への時代、バブル経済絶頂の頃、「ふるさと創生事業」が当時の竹下登・内閣総理大臣の発案で行われた。この時も地方に目が向けられた。ふるさとの良さを見出す地域の知恵や工夫が求められた。

今、わが国はコロナ禍の真っ只中にある。令和の時代を迎え、一年も経たないうちに新型コロナウイルス感染症との闘いに巻き込まれた。2020 年当初、中国で広がりをみせたこのウイルスはグローバルの極致ともいえる時代のなかで世界的に広がっている。「ウイズ・コロナ」「アフターコロナ」の時代においていかに生活をしていくべきか「新しい生活様式」が求められている。新生活では「コロナを止めるか経済活動を止めるか」の二者択一ではなく、コロナ禍の状況に順応した経済活動が求められる。一方のみの選択の先にはヒトも経済も悲惨な結果しか待っていない。当然、経済活動のひとつ・観光のあり方も変革が必要となっている。

こうした状況下、「マイクロツーリズム」[2)] が注目され始めている。「マイクロツーリズム」とは１時間圏内の地元観光客に着目するツーリズムの新しいあり方である。提唱する星野リゾートの星野佳路代表は、観光需要回復の第一段階として、これに期待する。何より「近場の観光」は地元の人々による地元の良さの掘り起こしの機会となるだろう。今回、瀬戸内海環境保全協会の会員自治体から景観に関する多数の情報が寄せられた。ひとつひとつが本シリーズのテーマ「瀬戸内における水環境を基調とする海文化」における「瀬戸内の日々の生活に根ざした身近な景観と保全の取り組み」を意識したものであり、提供された方々思いの詰まった人文景観である。瀬戸内には古代、中世、近世、近代、そして現代と、各時代の特色のある人文景観があふれている。西田正憲は『瀬戸内海の発見』のなかで次のとおり具体的に示す。

> 「先土器、縄文、弥生時代遺跡から、古代の古墳と山城、国府跡、国分寺跡、中世の水軍遺　跡（海城、山城）と合戦場跡、古代、中世、近世を通じて発展する神社仏閣と港町、近世の城郭、農漁村集落、さらには瀬戸内海に特徴的な段々畑や傾斜畑、養殖塩田跡、石切場、そして近代の洋式灯台、軍事遺跡、精錬所、現代の工業地帯、長大橋、

対潮楼から仙酔島を眺める（広島県福山市鞆の浦）

タワー、…海洋レクリエーション関係のリゾートホテル、マリーナ、浮体構造物、釣り桟橋、人工海浜等々…一方で、江戸後期になって、日本人はようやく歌枕的名所的風景からの離脱をはじめ、紀行文に遠景の俯瞰景の記述が目立つようになると瀬戸内海をひとつのまとまった地域と捉えるようになり、いくつかの灘は内海、そして美しい多島海として理解されるようになった。」[3)]

日本人は瀬戸内海の新しい風景を発見し、定着させていったのである。それは人文景観と自然景観が一体となったものであった。そして、一体となり調和した景観は瀬戸内海国立公園の誕生へと導いた。人文景観とは、一言で言えば、「時間と空間のなかで人々の日常や営みから紡ぎ出される景観」である。そうした身近な場所で「はっ」とする景観の発見、すなわちふるさとの再発見のひとつひとつがこれからの瀬戸内の可能性をさらに広げていくと考えられる。この一連の過程こそが令和時代の故郷再発見（ディスカバージャパン）といえるであろう。

（2）瀬戸内の身近な人文景観

人文景観をより具体的に示すと、家や町並みに代表される人文景、日常生活や行事などで出会える生活景、農林水産鉱工業が作り出す産業景が主なものである。これらを少し整理し、今回、瀬戸内の日々の生活に根ざした身近な景観（以下「身近な景観」という）として、⑴農林漁業景観、⑵商工鉱業景観、⑶交通運輸景観、⑷建築・町並み景観、⑸その他の景観（生活の風景等）の５つに区分して、情報が提供された。この５区分に沿って以下に特徴を抽出する。

・⑴農林漁業景観

農業景観では傾斜地と利用した棚田や段々畑に関するものが７か所（④と⑤は後述、「⑧柑橘の段々畑」（広島県呉市）、「⑨鹿島の段々畑」（広島県呉市）、「⑫狩浜の段畑（愛媛県西予市）、「⑬遊子水荷浦の段畑」（愛媛県宇和島市）、「⑭等覚寺地区の棚田」（福岡県京都郡苅田町））が集まった。この７か所のうち「⑤下津町方の段々畑」と一体的に形成されているといってもいいのが、2019（平成 31）年に日本農業遺産に認定された「④下津蔵出しみかんシステム」（和歌山県海南市）の景観である。石積みした傾斜地を利用したみかん畑の景観である。糖と酸味を微妙なバランスとするため、畑地に設けた土蔵でみかんを熟成させてから出荷するのが「蔵出しみかん」である。山頂などには雑木林を残して土砂流出を防ぎ、急傾斜地ではびわを栽培し地形に順応した農業を行い、里地里山の生物多様性を維持した持続可能性の高い農業システムとなっている。次に花を楽しめる農業景観として、「②綾部山梅林」（兵庫県たつの市御津町）と「⑦赤崎海岸のじゃがいも畑」（広島県東広島市）の２か所の提供があった。前者は「ひとめ２万本」といわれる約 24 ヘクタールの梅林で農業構造改善事業の成果として生まれたものである。後者のある安芸津町の木谷・赤崎地区は、明治末期からジャガイモの栽培が盛んな所として地元では有名である。